

介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 利用者氏名：I・S様(男性.70代・要介護3)

利用期間：H.31.3～現在利用中

大学病院にて進行性核上性麻痺の診断を受ける。右半身も感覚障害あり、平成30年12月に腰椎圧迫骨折により入院、退院後ご家族の介護力不足により施設入所となる。

内 容

Sさんは入所時、身の周りのことを出来る限り自分でしたいという思いが強くありましたが、麻痺の為、自力で身体を動かすことが出来ずトイレやベッドへの移乗の際に介助が必要な状況でした。また、人に頼むという心理的負担を軽減させる為か、必要以上にベッドから起きようとせず、居室で携帯ゲームをしながら1日の大半を過ごす生活を送っていました。

Sさんの中で自分の事を自分で出来る限り行いたいという気持ちと、誰かに頼らなければいけないという現実が生活の中でストレスになっているのかもしれないと思いカンファレンスで、身の周りの事はできる限り自分で行ってもらうように介助方法の統一を図り、役割も持てるように食事後のテーブル拭き等をお願いして承認からの自信回復に努めました。

その後Sさんはリハビリを意欲的に行い、約2か月間でトイレや移乗も自力で行えるようになりました。自力で車椅子への移乗やトイレに行く事が出来るようになってからはホールで過ごす時間が多くなり、近くの利用者さんと会話することも増えました。これまでよりも活気のある生活を送れるようになり、Sさんの表情にも笑顔が増えていったと思います。今では、朝の起床時には隣のユニットまで自走して行き、男性利用者さんへ「おはよう」と挨拶し、朝から楽しそうに談話している姿が見られるようになり、毎日のレクリエーションやしおんコーラス部などの活動にも積極的に参加されています。そして、家族カンファレンスの時に奥様から「最近、面会に行くと隣のおじいさんに会いに行ったことや歌のレクリエーションに参加したことなど、よく話してくれるんですよ。」と「家では自分から話したり、歌を歌ったりする姿を見たことがなくて話を聞いた時は驚きました。けど、本人が楽しく過ごせているようで本当によかったです。」とのお話がありました。

入所時は心身の状態などからほとんどの時間を自室で過ごすSさんでしたが、自分で出来る事が増えてきたことで行動する範囲が広がりしおんでの生活の中で、これまでになかった楽しみや他利用者さんとの関わりを持つ事でSさんのまた新たな姿を見ることが出来たと思います。これからもSさんの生活に寄り添う事で、活気のある生活を送る手助けが出来ればと思っています。